

地域連携による高齢者や要支援者の避難支援を想定した合同防災訓練

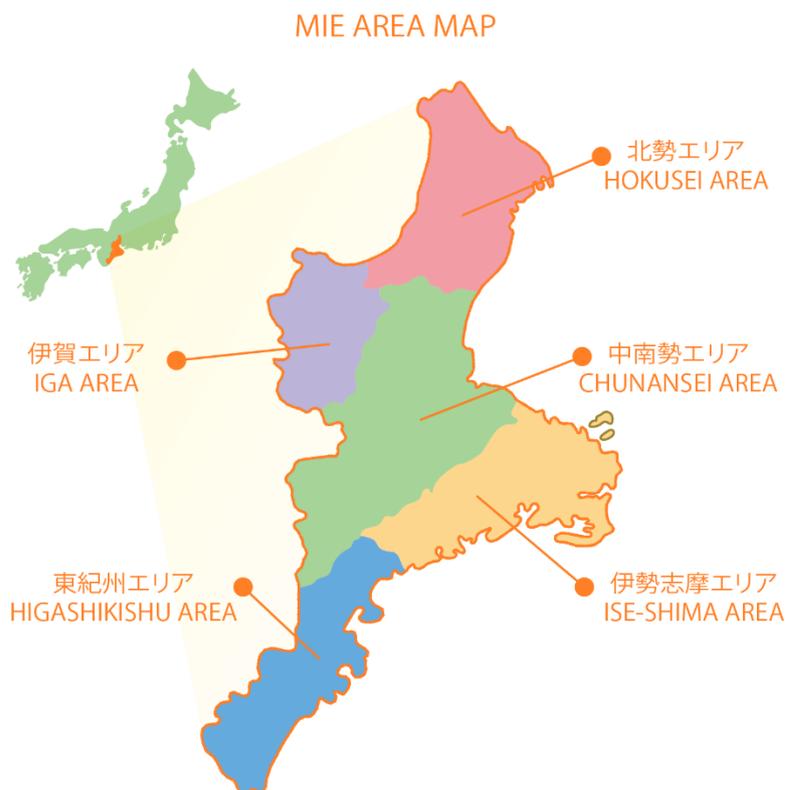
取組のあらまし

- 取組団体 三重県立北星高等学校（三重県四日市市）
- 取組内容 高校と地元の自主防災隊が連携し、高齢者や要支援者の避難支援を含めた合同避難訓練を実施
- 推進体制 16名（令和6年度）
- 予算等 54千円（令和6年度）

1 三重県の概要

- 人口 175万7,527人 令和6年1月1日現在（住民基本台帳人口）
- 職員数 15,171人 令和6年4月1日現在（一般行政部門）
- 総面積 5,774.48km² 令和6年1月1日現在（国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」）

図表 1 三重県の位置図



出所：三重県ホームページ
(https://www.pref.mie.lg.jp/miesummit/contents/2-2_post.html)

2 取組の背景・目的

三重県立北星高等学校（以下「北星高校」という。）は、三重県北部の四日市市に立地する県立高校である。同校は、平成18年に定時制と通信制高校が統合し発足した。学校名には、光り輝く星のような高校になって欲しいという願いが込められている。令和6年4月1日時点の教員数66名、生徒数1,678名である。

北星高校では、地域の自主防災隊である富田地区連合自主防災隊と連携した防災学習の取組を平成24年から毎年、実施している。きっかけは、平成23年の東日本大震災の発生であった。同校は、津波被害が想定される区域に立地しており、東日本大震災以前から避難訓練を実施してきたが、それは校内で完結するものであった。東日本大震災の津波の被害の様子等を受けて、訓練に関する考えを一新した。地域の高齢化や要支援者等の存在を認識したうえで、生徒の安全確保だけでなく、高齢者や要支援者の避難支援を含めた避難訓練の形を模索するようになったのである。また、同校は指定緊急避難場所であり、災害時に近隣住民が集まることが想定される。そのため、生徒による率先した避難誘導が期待された。

こうした経緯を経て、北星高校は平成24年から10年以上にわたり、地域と連携した防災訓練を積み重ねるなど、防災教育に力を入れてきた。その集大成として、令和5年度から地域住民との合同防災訓練を実現した。

3 取組内容

(1) 合同防災訓練

令和6年度の合同防災訓練は令和6年5月9日に実施された。参加者は同校の定時制生徒約250人と地元住民約100人の計350人が参加した。

合同防災訓練は紀伊半島沖で震度6強の地震が発生し、大津波警報が発令されたことを想定したものであった。住民は津波避難ビルに指定された同校に避難したあとに、生徒と一緒に高台にある高台にある久留倍官衙遺跡公園に避難することを目指した。

生徒は高齢者等の自力での避難が難しい地域住民を、リヤカーや車いすで運びながら公園までのおよそ1.4kmの距離を歩いた。

高齢者だけでなく未就学児も災害時の要支援者であるとの考えから、午後には幼稚園との連携による避難訓練も実施した。同校の生徒20名、教員10名と共に、幼稚園児（年長）20名、幼稚園職員5名、消防団員3名が参加し、東日本大震災被災者の助言をもとにしたリヤカーの引き方を参考に、引く生徒や押す生徒などに役割分担をしたうえで、幼稚園児をリヤカーに乗せて避難先の途中まで運んだ。

図表 2：合同防災訓練の様子



出所：三重県立北星高等学校

(2) 「命の矢印」シール

発展的な取組として、訓練後における防災意識の継続を目指すために、「命の矢印」シールの配布を令和5年度から2年連続で実施している。津波災害時に避難すべき高台の方角を示したシールであり、合同避難訓練の参加者や学校周辺の住民に配布することで、「防災の日常化」の意識啓発を狙っている。また、外国人にとっては言語の壁や情報不足が障壁となり、災害時に適切な避難行動をとれないリスクが高い。そこで、多言語版の「命の矢印」シールを作成し、地元四日市市で開催された外国人向けの避難所運営セミナーなどで、ベトナム・インドネシア・ネパール・フィリピン・中国出身の方々に配布した。

図表 3 「命の矢印シール」



出所：総務省消防庁「第28回防災まちづくり大賞 受賞事例集」p.33

4 成果・課題

(1) 取組の成果

北星高校と地域とが連携した合同防災訓練等の取組は、地域による自主的な防災活動の試みとして全国的にも注目を集め、三重県が主催する「みえの防災大賞」(令和4年度 奨励賞、令和5年度 特別賞、令和6年度 大賞)の受賞を皮切りに、防災体制の整備の部門で、内閣府の「令和6年防災功労者内閣総理大臣表彰」団体として表彰されるなどの成果をあげている。

地域に目を向ければ、合同防災訓練による成果として、地域全体における防災意識の醸成が見られる。参加した地域住民からは、「若い人と一緒に逃げられる安心感」、「生徒さんが声をかけてくれたので訓練に参加したし、具体的に考えることができた」との肯定的な声が寄せられている。連携先である富田地区連合自主防災隊の隊長は、本取組を「この地区は高齢者が多く、地域の高齢者や介護が必要な住民にとって、高校生の存在があることは大きい」と評価している。また、北星高校が生徒を対象に行ったアンケート調査によると、訓練に参加した生徒の91.8%が訓練参加による防災意識の高まりを実感しているという。

本取組は地域全体が前向きに受け止めており、今後のさらなる発展的な展開も示唆される。

(2) 今後の課題

地域の自主防災組織の隊長が北星高校の学校労務員として勤務していることで、防災担当教員と連携が取りやすい状況にある。これが連携強化の鍵となるため、現在の関係を維持するだけでなく、この取組のノウハウを他地域へ展開することが求められる。

また、学校と自主防災組織の全県・全国的な連携は、避難時のみならず、避難所運営においても重要である。特に南海トラフ地震のような大規模災害時には、一人でも多くの命を救うための鍵となる。そのため、この重要性を関係者間で共通認識とし、県内外問わず広く周知していくことが課題である。

関連・参考資料

一般社団法人 日本防火・防災協会「2024年6月『地域防災』」

https://www.n-bouka.or.jp/local/pdf/2024_06_32.pdf

総務省消防庁「第28回防災まちづくり大賞 受賞事例集」

https://www.fdma.go.jp/mission/bousai/ikusei/items/ikusei002_09_jirei28th.pdf

三重県防災対策部地域防災推進課「令和5年度みえの防災活動事例集」

<https://www.pref.mie.lg.jp/common/content/001155756.pdf>